

第 4 回 まちづくり戦略会議

平成 16 年 9 月 28 日

午後 3 時から午後 5 時

市役所本館講堂にて

司会

大変お待たせいたしました。ただいまから第4回まちづくり戦略会議を開催します。本日は伊藤委員，大熊委員，桜内委員が欠席です。

事務局からお願いでございますが，先回，第3回の会議録の原稿準備の都合で事前にお送りすることができませんでしたので，本日お手元に配布させていただいております。大変恐縮ですがお持ち帰りいただきまして訂正いただいた上で事務局までご郵送いただきますようお願いいたします。

それから本日の資料ですが，及川委員，横山委員から提出がございましたのでお配りいたします。

では，座長進行のほうをお願いします。

与田座長

それでは開会をいたします。本日のテーマ，都市の活性化を先回皆さんから前段だけやっていただきましたが，政令市になる新潟市をどういう部分で活性化をしていくかということで議論をいただきたい。時間があれば，それに伴う地域のコミュニティのあり方，この地域コミュニティの中でどのようなエリア区分，組織，あるいは活動内容が良いのかについて，現在の自治会はちゃんと機能しているかどうかということを含めて議論いただきたい。基本は都市の活性化でございます。

都市の活性化につきましては，先回の会議のときに皆さんから一言ずつ都市の活性化についてそのとき考えている意見を言ってもらっていますが，大川委員，大規模な投資ができる時代ではない，ソフトな政策が重要である。大村委員，住む人が地域の魅力づくりを考え，そこに根を張ることが必要。及川委員，空き店舗を活用してそのテーマタウンをつくるのも1つの案。伊藤委員，農村部の景観にもう少し配慮すべき，水田の多角化も景観を向上させる。大熊委員，通船川，貯木場の水上マーケット，堀の復元。横山委員，経済成長がなければ活性化はあり得ない。平沢委員，合併される側に平等に新潟市民と認識させることが活性化につながる。桜内委員，活性化は人が集まることとご飯がおいしいことが大事。来港者にもわかりやすい食の提供をしてほしい。このときは転勤してきたらどこで食っていいかわからないという話がでました。外国人の集まりやすいところがあるといい。西條委員，中心商店街の活性化には既存組織のほかに市民，行政を含めた実行組織が必要という意見を言っていました。

でもこの話には関係なしに本日はもう1回，この地域の活性化をどうするかということについてのお話をメインにさせていただいて，それでまず1時間流してみたいと思います。まず最初に市長が来られていますので市長から地域の活性化並びに地域コミュニティについてお考えをお話をさせていただきまして，スタートをしたいと思います。

篠田市長

都市の活性化，地域の活性化という面では，「雇用創出・産業活性化総合戦略会議」にいろいろとお願いをしている部分があります。基本的には地域に働く場がなければ活性化はありえないと私は考えています。その部分では，専門部会でいろいろ出していただいた意見を基に，アクションプログラムのものに練り上げて，来年度予算に反映できるものは大いに反映していこうと考えているのが1つございます。

その中でも特にある面では雇用の創出と心の活性化，誇れる地域にしていく。それが交流人口の増加につながる形になると，心の活性化と地域活性化につながってくるんじゃないかなと思うので，特に交流人口の増加というのを心がけていきたい。

そうすると基本的には美しいまち，歴史など地域の財産などに目を向けていく，取り組みの重要性というようなことが地域の活性化に重要なのかなと考えております。

またコミュニティ。分権型政令指定都市ということでできるだけ地域の方が自分たちの地域のことを考え，発言し，そして方向を決めていくという度合いを強めていただきたい。やっぱり自分の持っている能力，さまざまな能力をまちづくりに生かすということも，市民満足度を高めるという面でも非常に重要ではないかと思えます。そういう面でも単なる行政サービスを受ける側というふうに市民の皆様を位置づけるのではなくて，市民の皆様がまさに新潟というまちをつくり，まちの方向を決めていく中でコミュニティというのが非常に重要になるだろうと思えます。

ぜひ小学校区単位を基本として，中学校区単位でも旧市町村単位でもけっこうなんですが，コミュニティ協議会というようなもの，これは任意の組織になりますけれども，それを新市の全域で立ち上げていく方向で取り組んでいきたい。

まだ方向は決まっておりませんが，先の国会で認められた合併関連法案三法の中で地域自治組織というものをつくってけっこうですよということになりましたので，政令市を目指してこの地域自治組織を入れるのか。入れる場合はどういうふうな入れ方，タイムスケジュール，あるいはエリアの設定の仕方をどうするのか，このあたりを今13市町村長の意見交換会，あるいは議員の皆様と意見を交換して，できるだけ早く方向を決めたいと思っています。秋のうちには決めたいと思っています。

そんな形でコミュニティ，あるいは地域自治組織を活用するというのが分権型政令指定都市の非常に大きな骨格になるんじゃないかと考えています。

与田座長

今おっしゃる地域自治組織といわれるのはいわゆる区に1つという考え方ですか。

篠田市長

来年の7月ころには区のエリアの方向が区画審議会から出るわけですから，その区単位でできるだけ考えていったほうがいいんじゃないかと思っています。

与田座長

今おっしゃるコミュニティ協議会というのはその下にあるんですか。

篠田市長

コミュニティ協議会があって、区に1つあるそのコミュニティ協議会の代表が、地域自治組織に入る。そんなのがいいんじゃないかと思っているんですけど。

与田座長

コミュニティ協議会のほうは小学校区もしくは中学校区で1つつくりた。それが集まって区になって、区の中には地域自治組織があると、こういう感じですか。

篠田市長

それが区長とパートナーになっている区政の、これからの方向、区のまちづくりの方向を意見交換しながら決めていくというような形が望ましいのかなと思います。

与田座長

それと一番最初におっしゃった地域に働く場をつくっていくという、このあたりのかかわりが出てきそうですか。

篠田市長

そこはどうですか。

与田座長

交流人口についてはある程度、観光問題ですから、それは地域自治組織はいろいろな面で学ばなければならない部分はあると思いますが。

篠田市長

あと関係があるとすれば、例えばいろんな施設の維持、管理、運営なんか、今市が直でやったり外郭団体がやったり、

与田座長

みなとびあなどの例ですよ。

篠田市長

ああいうものを小さな施設はコミュニティ協議会で運営してほしいとか、地域で運営してほしいと。ちょっと中規模以上になるとNPOや民間企業にお願いしたほうがいだろう

と。民間にお願いすれば多様な雇用の場がそこから生まれる可能性がある。どうしても行政がやったり外郭団体がやると硬直した雇用形態しか出せないものですから、そんな部分では雇用の場づくりにもかかわるのではないかと思います。

横山委員

交流人口というのはどういう概念なんですか。

篠田市長

新潟を訪れてくれる方々を増やそうということです。

横山委員

具体的には観光客。

篠田市長

観光客だったりコンベンションだったり、商用やビジネスで来て、そのあと夜を楽しんでいただくとか、定住人口が新潟県は減少時代に入っているということで、活性化はなかなか難しい部分があるわけですが、そういう人口減少の時代になればなおさら交流人口を増やせる地域が非常に活性化の面でも可能性が大きくなるということだと思いますので、新潟に来てみたい、訪れてみたいまち新潟を逆につくっていきたいと考えています。

与田座長

おわかりでしょうか。

横山委員

大体イメージは。

与田座長

寺泊みたいに東京からわざわざ魚を買いに来る。観光バスを連ねて買いにきたりして、あれで入り込みが一時期一番大きいときで 240 万人あったそうです。寺泊 6 軒の魚屋だけです。佐渡が 100 万人を切っているんですから。それを考えればどのぐらいのものがパワーになるかというのは僕らは見えないところがありますよね。

一時、新潟は湯沢の入れ込みが 1,000 万人、佐渡が 100 万人いくかいかないか。そして魚を買いに来るのが 240 万人もあったというちょっといびつな格好をしていたわけですけど、それがだんだん変わってきているなと思います。交流人口についてもそういう点では同じです。

ただ聞いて見ますと、新潟へ行く用事がないという人が多いんですよね。

例えば六日町とか湯沢は意味があるんだけど、新潟市というのは佐渡へ行くための拠点ぐらいにしか考えてない人がけっこう多いという部分はいろんなところで聞きますよ。だからそういう意味でどういうふうに今おっしゃる交流人口というものを作り出していくのかというのは、地域を活性化するための1つの大きな要因でしょうね。

今一番交流人口で多いのは東京ディズニーランドなのかもしれませんが、あとサッカーの応援に来る人たちも増えています。この前もアルビレックスの試合を見に来た人、けっこう福島とか山形あたりから他にないからといって来ている。

そういう点で考えれば、いろんな呼び込む要素はあるけれども、それをすべて交流人口と考えれば新潟へ来る用事のある人たちですね。簡単にいえば。このあたりがこれから一番ポイントになってくる。それが地域を活性化する、さっき市長がおっしゃった地域に誇りを持てるという。おれ新潟だぜという、ちゃんとみんなに言える。隠さなくてもいいということがやっぱり大きいだろうなということでは、アルビレックスなんかは大きな効果を持っていると、市長もご判断されていますよね。

篠田市長

そうですね。

与田座長

ああいうことも活性化には非常に大きいと思っております。活性化の話に入っていきますが、まずせっかく資料を持ってきた及川委員からこの資料についてこれが活性化とどうかかわるかというのも含わせながら話をさせていただきたい。

及川委員

まずは新潟というのは花の街。しかし、これだけの街なのに他の都市に比べると緑が少ないまちですね。新津、小須戸、それから五泉は花の産地なんですね。これを生かして街全体を花で飾って、新潟に来ればいつでも花が見られるようにすることが必要じゃないかなと。確かに今も港地域でいろいろと整備されていますが、1つ足りないのはやはり花なんですね。

カナダのビクトリアに行った方はたくさんいると思います。ほかの都市もそうですけど、もちろんブッチャードガーデンがその奥にありますけど、とにかく花ですね。港は花でいっぱい、それがけっこう楽しめる。ですから周囲にある花の生産地をバックにした花の産品を大きく引き出すことによって交流人口というのがいろいろ出てくる。春花のシーズンのときは新潟はチューリップ、チューリップとやります。確かに市役所とか行っても一部の施設には花がありますけれども、花を資源として観光、ビジネスに活かすべきでしょう。

与田座長

おっしゃるようにガーデンみたいな形でいつも常時展示ができているとか、

及川委員

あと街の商店街、やはり商店街には全部花を置くぐらいのことをやらないと、それから港からずっと昭和橋のあたりまで、

与田座長

万代橋には置いてあるんですね。

及川委員

そうです。歴史記念館ぐらいまでは。両端に花を全部置くななどしないと。

与田座長

今おっしゃるように五泉、新津、小須戸とコラボレートしながら商店街が動けばいろんなことでもっているようなイベントができるよ。

及川委員

そういうことですね。それこそ活性化と雇用にもつながります。花の管理だけでも雇用につながるし、そういう意味でそれを1つの大きな武器にすべきではないのかな。そんな考え方を持っています。

あともう1つは都市と農村。農村といったら怒られるかもしれませんが、その交流の場というのがあります。今は地産地消と盛んに言っています。そういう意味で市街化調整区域をうまく使う。市街化調整区域の開発は一応できるようになったんですよ。ですから市街化調整区域の真ん中とかに農家の方が作物を持ってくるとか、あるいはレストランを開くとか、そういう交流の場を設けることで、都市と農村の交流がもっと活発になるんじゃないかなと思います。そういう意味で農業地域における生きがいのようなものが出てくるんじゃないかなと考えていました。

ちょっと話を転じまして、このあいだ北九州市のエコタウンに行って来ました。どんどん工場や施設ができていますので毎年行ってウオッチングしているんです。

非常にうまくできて、PCBの処理装置も11月から本操業に入るといことです。そのPCB処理施設は400億円を超える設備です。

実はこの1つの大きな特徴というのは2つあると思っています。1つはここに中に入る企業群の仕組みのあり方が非常にうまくできている。どういうことかという、1つは大体中小企業だけでやろうとすると、仕組みだけで5年間は持ちこたえなければいけない。だから5年間で自前の資金で動けるぐらいの資金ベースを持っていないととても立ち上が

らない。

ですから、いくら県・市が補助金を出しても、結局は2、3年で頓挫してしまう。うまくいく事業所が少ない。

ここはどういうことを考えているかという点、中小企業というのはノウハウをたくさん持っています。でもそれを表に出したがない。自分で押さえている。それじゃだめなんで、売る人、買う人、あるいは大きな技術を提供する人、お金を出す人という感じで大手の企業と必ず組ませるんですね。銀行もそこに入れて中小企業という形で足腰を強くしてやっているところが成功の第一ポイントなんです。

それから第二はやはり中で出たものは全部中で処理して全部リサイクルするということです。例えばあそこに2カ所大きな自動車リサイクル工場があるんですけども、ここでは車のシュレッダーダストを埋め立てに持っていかずに全部燃やす。燃焼させてそのエネルギーを発電に回す。そして出た電気を安く地域に提供するというのを考えてすべての仕組みづくりをしています。すべてトータル的に地域で全部使い切って、エネルギーまで最後には出して、安い電気を提供すると。

与田座長

ゼロエミッションですね。

及川委員

この間から言っていると通りのゼロエミッションをうまく実現している。だから今までの補助金、助成の仕方のように、ただやるんじゃなくて、しっかり5年間はおもてるぞという仕組みを組んでから補助なり、助成を県、市、国が出すということなんですね。だから成功できる。この辺だと思います。

与田座長

ゼロエミッションは及川先生はずっとテーマでございます。北九州市は、35、6年前に政令市になった市の1つですね。それが合併して103万人ぐらいたたものが、一時110万人とか116万人まで増えましたが、例の鉄冷えの問題で落ちて、今もうすでに戻って103万、104万人になっています。

及川委員

今は100万人をひよっとすると切っているかもしれません。

与田座長

そこで再生を期してやっているのがこのエコタウン事業だと思います。だから地域の活性化という中でいわゆるエコという資源リサイクル、あるいは中小企業を活性化しながら、

それを地域の魅力に変えていく。それが1つの方向として地球の目指すべき資源の省エネ化，あるいはリサイクルというものを一緒に合体化させながら地域をうまく売り込んでいっている。

だから交流人口というのは先ほど言いましたけれども，これだけでもあそこに視察にいくだけでもお金がだいぶ落ちていると個人的には思っていますね。

及川委員

受けられないくらい視察が来ています。

与田座長

だからそういうところで地域の活性化をエコという面から図っているのが北九州市であると。前にも申し上げたように彼らも34年目の実証ということで，我々は政令市になってどうだったのかというレポートを出したそうですが，今まで鉄で生きてきたが，これからは鉄から新しい分野に切り替えたのがこの事業だと思っています。こういうふうな形の地域の活性化もあるという事例としてちょうどいいんじゃないかと思います。

及川委員

政令都市・北九州として市長がエコタウン構想を出したのが人口減になってきた危機感と雇用の創出ということで。

与田座長

雇用の創出，危機感の緩和，それに今いったように交流人口が増えるし，方向は間違っていない。そういう意味では割りと二兎か三兎ぐらい追っているんですけど，それだけ今のところ上手に機能してきているというのが北九州のいい例だと思います。

それでは，先回お休みでした熊谷さん，活性化についてお考えになることはどうでしょうか。

熊谷委員

難しいテーマだと思います。さっき市長さんがおっしゃったことに非常に似ているんですけども，やっぱり都市の活性化というのは2つのポイントがあって，住んでいる方の懐があたかくなるというのがあるんだと思います。食べていけないとやっぱり活性化しない。雇用創出というのは大事だということと，それから来訪客がある，交流人口を増やすというのはもう1つのポイントなわけですね。それがどうやったらできるのかというのは簡単にいえるような話ではないですけど，私も古町の活性化のフォーラムを9月にやったんですが，都市の魅力にはいろんな切り口があると思いますが，やっぱり魅力がないと，ビジネスの用事でくるお客さんというのはそうは増えないものです。それが佐渡観光

も落ちてきている中で、新潟を目当てに来るお客様が少ないというのはちょっと寂しい。そこをどうやって増やしていくかということなんだろうと思うんですね。

私最初のご紹介したように、20年前も実は新潟に来ました。あのときは希望して来たんです。私は新潟というのはそのとき行ったことがなかったので、新潟へ行ってみたい。そのときどういうイメージがあったかという、新潟は海があって、おそらくリゾート地のような快適性を持っているだろうなと思って来たんです。

そのときに新潟へ行ったら酒を飲んで、うまいものを食って、美人も多い。というような期待感があったんですね。来て半年で10キロくらい太りました。期待どおりよかったんですね。

そういうものがあれから20年たって魅力度をアップしているのか。要するに新潟以外の人たちの間で、新潟の魅力というのはあの当時と比べてどうなのか。どうもしぼんでいるような気がするんですね。新潟へ行ってみたいねとかいう人は減っていると思います。

もともと持っているものを磨いていったらいいんじゃないか。古町のフォーラムでも古町をもう少しよくして、やっぱりいい街で、行くと楽しくなる街になってほしいということをお願いしました。

例えば、新潟には柳都で芸者さんの会社があるんですね。芸者さんがいるのに古町を歩いている姿をあまり見たことがない。若い芸者さんが歩いている姿など演出のやり方はいろいろあるんじゃないかと思うんですね。そうやって新潟にはぜひ一生に一度は行ってみたいなというような演出。森鷗外が新潟に出張するというので非常に喜んできたというような話が昔はあったと、この間市長からお聞きしました。すごく楽しみであったと。森鷗外の先輩の石黒という軍医が新潟の出身だそうで、そういうこともあったのかもしれませんが、そういう新潟へ行ってみたいなと。新潟へ行ったらうまい酒を飲んで芸者さんに酌をしてもらえとか、そんないろんな魅力を研ぎ澄ましてきていないということを感じます。

与田座長

それはありますね。風情がなくなったということです。それは森鷗外の時代ですと堀があって柳があって芸者さんがいて、きれいな街だったと。よその者も新潟へ来て言っていますから、けっこう新潟は人気があった時代があったが、それが今おっしゃるように研ぎ澄まされてきていない。さっき及川先生は農産物の話がありましたけど、やっぱり新潟はせっかくうまいものもあるから一緒に合体すれば面白いものがあるし、その辺が研ぎ澄まされてきていないという部分は一番大きいかもしれませんね。

熊谷委員

寺泊にそんなにたくさん人が来て、新潟を目指してくる人がいない。ということだとすると、20年前の方がまだよかったような感じがしますけれども、何かもったいないなと思

ます。そういう意味で都市の魅力度アップというのはいろんな手法はあると思いますけれども、それらをやって交流人口を増やしていくことが大切ですね。

与田座長

そこが一番のポイントですね。というのは今は魅力がないと。あるにもかかわらず研ぎ澄まされてきていないと。

長谷川委員

交流人口の増加というのはとても大事なことだと思うんですが、交通の面からいうと北陸新幹線の問題があったりで、新潟が孤立化しそうな気がする。それを突破するだけの魅力づくりは必要だろうと思います。

地域の魅力といったときに美しい女性とおいしいおコメとおいしいお酒というのも男性にとっては惹きつけられるけれども、女性にとってはどうなんだろう。

おいしいほうがいいですね。ラーメンもおいしいですし、新しいそういう部分もあるかもしれないんですけども、学会などで夫婦同伴で来られたときの奥様をどこに回していくかというのも問題です。大都市の中で冬に白鳥が飛来している姿が見えるというのはまずないだろう。あと荒海というものもぜひ見てみたいというような要望もありますが、見るような場所がない。

というようなことがあって、いろいろ施設を造ったり、仕組みを作ることで見えてくる部分もある。けども私は、新潟は人がいいというのを魅力にしたほうがいいなと思っていて、人情、人情と言われているけれども、本当の意味でのサービスはできているのかという部分はすごく不安です。

例えば私が高山市に行ったときにお土産ものを忘れ、もう一度同じ商品を買に行ったときに、どうしたの、さっき買ったのと言われて、どこかに置き忘れたという話をしたら商店街のコミュニティ紙に失くしたということを広告を出すから名刺ちょうだいと言ってきて、すごく親切でした。本当にその人の身になって考えてくれるので、夕飯をどこで食べたらいいのといったらすぐ答えてくれるような、コミュニケーションも活発に行われて、とても人がいいから行きたくなる部分もあるのかなと思いました。

先回これなかったのはシンガポールに行っていたんですけども、シンガポールって割りと新潟っぽいなと思っていて、シンガポール自体にはあんまり見るところも行くところもなく、そこを通過して島に渡ったりというようなところなんですけれども、シンガポール空港がバスを回していて、すべてのショッピングセンターを回すんです。途中でガーデンとかを入れて。今の100円観光バスに似ているんですが、違うのは中で観光案内をすること。それから中国語、英語、日本語、韓国語というような4カ国語でそれをするということで、中にいてもそれを楽しめるし、外に出てもわくわく感がある。

身障者にとってどうだろうと思うと、残念ながら低床バスじゃなかったために、高齢の

女性客からはバスのステップが高いというクレームがついたりはしましたけれども、たまたま車椅子のカップルが乗ってきたときに、みんなで一緒に介助したりというようなところもあって、すごく人がいいなというような印象があったので、人がいいというのが何処ら辺で本当の意味で地域力として発揮できるのかな、という部分が問われているんじゃないかなという気がしています。

地域の魅力は地域の人が自発的に発掘するのも必要ですけども、やっぱり評価されないと活力にはつながりません。評価されてれしくて舞い上がっていかないと活力にならない部分もあるので、クレームもエールだと思ってどんどん聞いていく積極的な姿勢があってもいいのかなと思っています。

与田座長

今話題になった人情というのはこれなかなか難しい。じゃあ具体化するときにはどうかというと、今、高山のお話を聞くとコミュニティなんです。基本的には。そのコミュニティがしっかりしているかですよね。それも今の話でいえば商店街というコミュニティも1つあるわけですね。住民としてのコミュニティもコミュニティだし、商店街というコミュニティもコミュニティなんです。そういうものが新潟の場合しっかりしているかということ、共通のコミュニティになっている商店街はないと思います。会社でお客様には心を込めて挨拶せよといったってしない。はっきり言うと。自分の会社でできないことを街でできるかということです。

コミュニティをしっかりされることによってお金を大事にしようということが出てくるんだと思うんですよ。具体的には。今長谷川さんのご意見というのは人情と思ったけど、言い換えれば地域コミュニティをしっかりしましょうと。それには商店街ももちろん入るし。

みんな新潟は人情が厚いよっていても、1人だめなやつに当たった瞬間にだめですから。二度とくるかと。私いつも言われているんです。それはいくら教育していても1人が一言言った瞬間に全部パーですよ。これはやっぱりコミュニティをしっかりさせていく以外にないかなというふうに聞いていたんですけどね。

長谷川委員

商店街の場合はそれが高品質のサービスになるかですよね。商店街は、それが顧客満足度に直結しているんだという危機感をもって取り組む必要があると思います。

与田座長

今の古町は商店街単位じゃなくて自分の店単位で考えているから、やっぱりコミュニティが弱いんでしょうね。

それでは大浦委員お願いします。

大浦委員

今の流れでいきますと古町は街並みは非常にきれいになったんですが、その分だけ人がいなくなった。お客がいなくてお店の人の顔が見えなくなった。みんな店の奥にはいるんでしょうけれども、古町全体としては非常に無機質な感じになった。きれいだけど無機になった。

与田座長

アーケード造ったのは失敗だったでしょうかね。

大浦委員

それはいいんでしょうけど、もう一步、中に居ないでみんな店の前に出て、うちはすごくいいものを持っているというのをアピールするぐらいの気持ちにならなければいけないんじゃないかと。建物が全面に出たのはよくないですね。

与田座長

今の古町商店街は、人が出ないで建物が前に出ちゃっていると。

大浦委員

それから古町全体を歩くと、どこもみんな似たようにしか見えない。東京を歩いていても新潟の古町を歩いていてもあんまり変わらないようになっている。きれいになった分だけ魅力が減ってしまった。むしろ古町の例えば横丁に入って、盆栽があったり、大きなきれいなバラが咲いていたりすると、すごくほっとするんですね。だから古町の魅力は私にとっては今は本通りじゃなくて脇をそういうふうに縫うのが楽しい。

でも、あれはあれで魅力があるというのが少しずつ伝わっていけばもう1つ別の魅力になってくるんだろうと思います。

それからせっかく新潟にいて、芸者さんが歩いている姿が見えないというのはあるんですけども、着物の産地を新潟県に持っているわけですから、新潟の街の中で着物を着ている人にしょっちゅう会えばまたずいぶん雰囲気が変わると思います。そんなふうにならんと横丁に入ると、ごく普通に着物を着て歩いている人がいるというのはすごく大きな魅力になるだろうと思います。そうすると風情もずいぶん変わると思います。

それから新潟市内のところどころで、歩行者用の道路ができていますね。あれはとても魅力的だと思うんですよ。そのときに全部街並みをきれいにしちゃうんじゃなくて、街並みはそのまま生かして、季節の花が置いてあるような生きた人が住んでいるというような雰囲気をきちんと保って、本当に人がここで生活しているんだなというのが半分わかりながら、ああ、こんなふうになっているというのがわかるようなまちづくりをぜひやってほしい。

与田座長

市がやると無機的にきれいになるだけなんですよね。これで掃除が簡単だとか。そういうことは市がやるんじゃなくて、そこに住んでいるコミュニティの人たちがそれに参加すればもうちょっと良くなる。例えば花をおきましょうといったときに、お宅の前に置いてあるんだからあなたが水くれをしてくれとか、そういう関係ができてないんだろうか。そういうのがないと、きれいにだけするけど、あとは勝手にせいみたいな話になるんですね。

大浦委員

せっかくきれいにしたなら木も植えてほしい。特に暑いときは雁木は別ですけど、木陰があるとずいぶん違う。

与田座長

木があると掃除をしなければだめだ。

大浦委員

掃除はコミュニティで、自分の街だというので責任を持っていくというようにしないと、市で掃除をしますといってもとても市はできません。

与田座長

新潟祭りの後始末だけで 3,000 万円もかかっているんですから。ばからしいと思いませんか。

大浦委員

昔は自分の家の前は掃除したんですよね。そういうふうにしていって初めて、ああ、これは自分の住む街だと思えるようになる。だから市が全部やるんじゃなくて後始末。つまり一応設備は市が全部造ってくれた。だから、そこから先は自分たちがやるというふうになってほしい。

与田座長

それは基本的にはコミュニティを育てるという材料になりますよね。市が全部やるんじゃなくて。

大浦委員

それから自分のところはほかと違うんだというのをもっと自覚してアピールしてほしい。例えばこの街に入ったら例えば同じ花がずっと並んでいたとか、あるいは同じ旗が並んでいるでもいいんですね。堤燈が並んでいるでもいいんですね。あっ、ここはまた別の街な

んだと思えばそこを歩く人がまた新たな気持ちで参加できる。そうじゃなくてずっとのっぺらぼうだと、また同じのがあるわと。それぞれ自分の街は他とは違うんだというところを作ってもらおう。

与田座長

それがコミュニティ強化につながると。

大浦委員

それから新潟は宣伝が下手。例えば花はここにあるというんだったら、何とか街道というのをよくほかの県では作りますよね。木が1本しかないのに何とか街道。そんなふうな形で魅力を上手に宣伝をする。そのためには、それぞれのコミュニティで自分の街のコミュニティの売りはこれですということをつくってもらって、努力してもらって、維持してもらって、そして名乗りを上げてもらう。

与田座長

研ぎ澄まされていないとさっきおっしゃった熊谷さんの意見と同じですね。

大浦委員

そういうふうにしていくことがすべてです。そういうふうに地域全体としてそろっていることが新潟市を活性化するだろうと思います。

与田座長

大体新潟はそういうふうな素材は持っているんだけど、全然磨いてないじゃないかと。それも磨く方向にきちんとベクトルを合わせてないねと。それだけ恵まれているから、今まで何もしなくてもよかったんだね。

大川委員

とりあえず古町の話も出たから言うんですが、最近見ていると若い人もう夜の古町には来ないんですよ。駅南にだけ集まるんですよ。一方古町にはマンションがたくさんできていますから、今や中高年の回帰という話もありますから、そしてそういう人たちを相手にして、そういう人たちを巻き込んだ形で古町をもういっぺんやり直しをすると。にぎやかさはむしろ駅南かどこかに持って行って。

それから市長さんがおっしゃいましたが、人の交流という点からすると、学会、コンベンション、いろいろあると思うんですが、その中でいろいろの話が出ていました。新潟は少し今までの佐渡、その他の上にあぐらをかいていたんじゃないかと。よそへいくとどんどん進歩しているんですよ。温泉だってかつて赤倉とかけっこう有名だったんですね。

今全然だめでよその県のほうがはるかにいろんな面でよくなっているんですね。それで、佐渡、村上もちょっと本気でやり直しをやってますし、それと結びつけて、新潟市ももうちょっと何とかならないかなというのが1つ。

それから、私ははっきり言って酒が好きなものですから、地産地消で新潟の野菜で本当においしいのがあるんですよ。

もう1つは日本酒離れといいますけど、ビールなんていうのは発泡酒が安いから売れるんですよ。定価はそうでもないんですよ。ところがお店で出るお酒というのはめっちゃくちゃ高いんです。

これは東京の銀座、あるいは札幌のすすきのとか、そこらと同じかそれ以上の高さなんです。新潟にきたらいいお酒を安く飲めると。おいしい食事と、なお新潟の銘酒を安く、

与田座長

酒を安くしろと。

大川委員

そういうのも案外売りになると思うんですよ。単純明快なところで。

与田座長

それは市長も非常に同意しやすい意見だと思いますが。

新潟は酒が安いというのはいいかもしれませんね。

及川委員

そうですね。どの酒を飲みたいけどどこで飲んだらいいかというのがわからないですね。

与田座長

桜内さんが言われましたよね。転勤したけどどこで飲んだらいいかわからない。どこで食っていいかわからない。

及川委員

何より新潟はいい酒があるそうだけど、どこで飲んだら飲めるかとよく聞かれます。

大川委員

高速道路もできたので食材がどんどん関東に流れちゃうんですね。南蛮エビ、地元は南蛮エビというと思うんですが、東京へ持っていくと甘エビなんていう気持ちの悪い名前をつけて、値段がべらぼうに高くなると。それを新潟は甘エビなんていわないで南蛮エビを安くおいしい酒でいただけると。そういうこともやっていくと違って来るかもしれない。

与田座長

都市に迎合せずに名前は名前で通せと。

大川委員

バブルの流れで、時代が違ったからあのころは東京の流れではないかと思っていた。今はチャンスだと思います。

与田座長

食はもっと安く。場所もきちんと明らかにしていけと。やっぱりちゃんと磨いてないんだ。

西條さん、お待たせしました。

西條委員

先日あった、古町とか本町の皆さんの勉強会で、過去にあった商店街の中心市街地の活性化の基本計画を見直しましょうとか、TMOの構想を見直しましょうとかいうのをやっている中で、昭和58年に新潟市の商店街が造った活性化の計画、報告書という資料の見直しをしていて、20年たってほとんど問題解決されていない。

与田座長

報告書が出ているだけであると。よくあるパターンだよな。

西條委員

できたのは古町7、8番町のアーケードができたぐらいで、20年前から工夫がいると書いてあるんですよ。商店街の人と話し合いをして、なんで20年間何も手をつけられなかったかということ、それをやって実行されるかどうか不安で行動できなかったという反省の弁があったんですけど、さっき長谷川さんの話の中に承認とか評価というのが大切だという話があるんですが、やっぱり商店街の活性化にしてもいざやろうとするとお金もかかるし、人手もかかるし、でもやってみると評価があるのかもわからない。それは客が来るかどうかもあるからさまな評価になるんだけど、商店街の人に任せるのはいいんだけど、それを支えてあげて評価を上げていくのは、お金の補助金だけではなくて、気持ちの上で支えてあげるとか、評価の仕組みもいるのかなということも思いました。

あと若手の店主さんの発言の中では、進んでないとはいっても古町にはアーケードもできたし、商店街づくりは着々と進んではいるんだけど、自分の店をどうしていったらいいか自信がないと。どうやったら客が来てくれるかわからないので、要は個人個人が動けないだというのが若い人にもあったんですよ。

そうすると行政の整備と各店の関係をどうつくっていくのか、誰が都市の活性化、商店

街の活性化をしていくのかというのがやっぱりばらばらになっていて、上手にリンクできないんだなというのがありました。さっき大浦先生の話で古町に行っても人の顔が見えないというのがありました。その背景は商店主が住んでいないというのがあると思うんですよね。昔は住んでいたから、朝は玄関の前を水まきをしたけれども、今はやってないから汚いままになっているしというところと、ここで都心居住をいかに図っていくかが出てくるわけで、今大川先生からマンションが増えてきて中高年の方が増えてきたという話がありましたけれども、それも含めてどうやって都心居住を進めていくかというのが出てきた。

あともう1点だけなんですけれども、新潟はすごく頑張っている人が普通の市民の方にもすごく多くて、いろんなことをやっているんだけれどもお互いのつながりがすごく少ないなという気がしました。目的は同じはずなんだけれど、地域の方たちが自分たちの課題を解決しながら新しくこういうことをしましょと、いうことは同じはずなんだけれども、手法も違うしメンバーも違うし、でもお互いにいいところを向き合っているんだけれども交わりがなくてわからないという、すごくもったいないという気がしました。

与田座長

同じことをいろんな方式でやっている。

西條委員

同じ支援体制だけどやっぱりまちづくり系の人とベンチャー系と。でもやっぱり根っこは同じはずなんですよね。新潟で働く場をつくって元気になろうというのが、全く大人の顔も違うし学生の顔も違うし、両方に入っている人は居心地が悪いような、でもすごくもったいないような感じがすごくするんです。これをうまくくっつけるとまちづくり系の人でも経営的な視野がなかったら運営ももたないところもあるわけだし、企業もベンチャー系の人でもやっぱり街のみんなに受け入れられてなかったら混乱する部分もあるだろうと思います。皆さんの支援とか応援があってこそ、アルビレックスじゃないけれどもぐるぐる回ると思うので、根っこが同じでみんないいんだけれども、みんながバラバラになっているのが残念です。

与田座長

一本化をするべきだと。

西條委員

一本化かもしくは

与田座長

統合すべきだと、

西條委員

交流がいいと思います。一本化はたぶんしないほうがいいと思うんですよ。やり方が違ってくるところもあると思うので、あまりにもバラバラでお互いに知らなさ過ぎて、すぐもったいないような。そこら辺をうまく結ぶ中間支援組織みたいな言葉が最近ありますけれども、人が増えると本当にいろんな人が増えてもっといいものがいっぱい出てくると思うんですね。それをうまくくっつけてあげるような仕組みがあったらいいのにな、というのがこのところ思うところですよ。

与田座長

もともと国の縦割り行政がそのまままきいているところがたくさんあって、国土交通省で昔の建設省系と通産省系と全然違うことをやっている。同じことをやるのに補助金が違うとか、この辺はやっぱり市という段階でもう1回統合して出すというふうな、1回そんしゃくしてから出すみたいなことをしていかないと、今までのように国から補助金が出ますよ。はい、これこっちから出ました。おたく、商店街で補助金がつきましたよ。使いますか、使いませんか、使うならやりますよとやっているだけでは、政令市というのはすまないと思う。自分のところで政策をもって国からきたやつを自分のところで一元化してきちんと使うとか。

商店街さんも商店街さんで、やっぱり補助金だけ待っているところが多くて、個店はどうしてくれるんだと言う。個店は自分たちでやれというんだけど、最後おれは金を出すのはいやだと。どうにかして補助金でやりたいとか、この辺にってしまったのは国の政策の問題はあるんですよ。

だから今の話でいえばいろんなニュービジネスとかそういうのはあるんだけど、基本的には市で1つにまとめた上で政策を1つにまとめて出すというような形のシステムが必要かなと個人的には思いますけどね。

平沢委員

私は定住人口のほうを生活者としてちょっと考えてきたんですけど、今熊谷さんはじめ皆さんの街を磨く話を聞きますと、少し希望が出ました。

私は消費者の1人として古町のさびれゆくのを20年間ただ見てきました。そして社会の吹く風に抵抗するというのはいかに難しいか驚きました。私どもの年の人たちは専門商店といいましょうか、帽子だったら帽子屋さんに行って買う。こういうものだったらこういう専門店に行って買う。そこでいろいろと現物を見せて、あそこからくるから確かなものだ。これはたいしたことないからおたくさんには売れないという、そういう消費者と売る人はしっかり信用をし合っている。そしてすぐそこへ持っていけば直してくれる。そういう深い関係のもとの専門店が大切な場所だったんですけども、みるみるうちに廃れてなくなっていく。

和服でもみんなまた洗濯をしてくれたり、特別なのはちょっと電話をかけるとそれを持ってきてくれたりというふうに、みんな関係があって、その人たちからいろいろな知識も得られていたんですけれども、今はどこへ行ったらいいかというデパートに行くより手がない。デパートに行って探すとそれはうちには売っていませんという。生活者の必需品でももうからなければもう店には置かないというそういう商店のありようになってしまう。ですから買いに行っても心の充足感はない。

私は消費者運動をしていて多くの農家の人と知り合いになりました。ですから、今でしたら大風が吹いたらあそこの農家の梨はどうなったんだろう心配になる。大きな立派なまとまったキュウリとかイモ類が売っていると、残った小さな粒たち、曲がったキュウリはどうなったんだろうと心配になる。それもみんな一緒に売ったり買ったりしたいと思う。

しかし今は、売る人と買う人はぴったり分かれてしまった。私は初め消費者の側が悪いんだと思いました。安い安いのはばかり探しているからこういうことになるんだ。そうすると売り手も安いのを探すことになる。品質の良いものは簡単に安くはつくれません。私の専門の分野は衣服なんですけれども、衣服でも安いだけの価値しかないものを売らないと生きていけないということだと思っただけです。品質の高い物作りが技術大国日本の誇りです。低価格競争は技術者を追いつめています。

そういう点でいま見ますと、古町が寂れてしまったのに、こっちは何も手を打ちませんでした。そして困ったことだと思っている無責任な消費者でした。さっきお話にあった古町芸者も、昔のような人はいませんでしょうね。置屋さんがいてそこで一生懸命教えて一人前にして、そこからちゃんといろんなところに出て人々を魅了してきました。今はサラリーマン制にして着替えて接待をする。踊りも踊る。そういう人たちが昼間も踊りつきのお昼を出したり、一生懸命で努力している姿をみて、新潟に生きて人々の心をうるおした古町芸者、これからはどういう形で残るか期待している一人です。

定住人口の話はあとに回します。

与田座長

わかりました。今の話で専門店がなくなったというのは商店街にとっては一番大事なんだと、平沢さんのお話をお聞きしてつくづく思いましたね。デパートへいったって店員さんは専門家じゃないんですね。ところが専門店のよさというのはさっきおっしゃるように全部置いてあるし、説明すれば全部わかる。私は帽子屋さんへよく行くんですけど、向こうが全部わかる。ところが今のデパート、帽子屋がなくなった。行って聞いてもわからない。

平沢委員

こういうものをと説明してもわからない。つまりみんながただお金のために勤めているだけで、さっき市長さんが言った誇りを持ってといったって持てない。消費者と売る人たち

の関係が切れている。生産者と消費者も切れてしまった。それがまた交流を始めると農家の真剣さや食べ物へのありがさもわかる。そういう精神生活の交流がないというのは本当に人間が一人前にはならない。何でも安くしてとって、その技術を消費者がみんなつぶしちゃった。ですから誇りある技術者も本当にかわいそうだけれどもなくなってきつつあるのではないか。

与田座長

いい話です。やっぱりその辺が我々にとっての1つの大きな転機なんでしょうね。

横山委員

私は新潟大学に16年いまして、定年後医療福祉大学で2年、計18年新潟にいますが、18年前から新潟の知識は全く増えておりません。さっきチューリップの話がありましたように、ごく最近まで私はチューリップは富山県の砺波だと思っておりました。新潟県の県花がチューリップなんだそうですね。春になると萬代橋のところにほんのいつときチューリップが並ぶと。ああ、やっているなというぐらいのものでありまして、新潟市に密着した発言は全くできません。

お手元に用意しましたのは今までどういう発言をしていたのか、それからどういう反省をしたのかというようなことを書いてみました。マーク・トゥエンという作家がおります。彼は実に面白い作家でありまして、牧師に日曜日の説教を聞いて、きょうの説教を全部書いた本、持っているよと言ったら、牧師は驚いてぜひそれを送ってくれといいました。しばらくしたら英語辞典を送ってきたという。たしかに全部辞典には全部言葉が書いてありますよね。

トゥエンはまず事実をつかめ。そして曲解せよと言っておるんです。我々は曲解しなくてもいいからそこで戦略を練るとのことだと思えます。

戦略を練るときに私を含めまして、発言は市レベルなのか、県レベルなのか、国レベルなのか、あっちいたりこっちへいたりしているんですね。ここでは市のレベルで考えるべきところが、県のレベルであったり、場合によっては国政にレベルであったりしていますから、これをきちっと市のレベルにしていかなないとだめだ。

といたしますのは、政令指定都市うんぬんという、虎の巻みたいな本の後ろに、政令指定都市になったらどれだけ行政が変わるかという一覧表があるんです。これを見て見ますと、地方自治法の施行令に関係すること、それからそれに関係しないものというふうに分けて、政令指定都市になったら事務が移行するんだということを書いています。

政令指定都市になったことによって国政からストレートに県を飛び越えて市に移行する事務があるのでしょうか。ここに載ったのを見ますとわからないんですね。

それから多くの場合は県から移行してくるもののようです。地方自治法の施行令によりまして、民生行政に関するもの、保健衛生行政に関するもの、都市計画に関するものの3

つがありまして、いくつあるかと数えてみましたら、民生行政に関するもの10ありました。それから保健衛生行政に関するものは5つあって、その中の3つは社会保障、基本的には社会福祉、もっと曖昧な言葉でいうと福祉にかかわるものであります。ですから政令指定都市になることによりまして住民と市、県、国においてより密着した関係を持てる側面があると思います。

そういうふうにして考えてみますと、例えば私が知っている新潟県に関する、知識であります。新潟県は高齢者の自殺率が非常に高いんです。これを政令指定都市になったときにこれを低めていくとすれば、活性化という面でプラス面であるのではないんじゃないでしょうか。

ですから、まず事実をつかんで、曲解しないで、我々は戦略を練ろうじゃないか。どここのところをより強くしていくかということを見ると、このまちづくり戦略会議というものが意味のあるものになっていくんじゃないかと私は思います。

与田座長

ただ今の先生ご指摘のように、いろいろと市、県、国のレベルとありますけれども、我々がそれを1つずつ斟酌しながらしゃべるとさっぱり話が盛り上がらないので、我々の気持ちにはもちろん市のレベルを目指しますけれども、いろんなことをたぶん言うと思うんです。いろんなことに関して。

例えばゼロエミッションはどちらの仕事かといえば、国の仕事ですよね。だけど市としてそれをやっていこうということを考えれば、事務局が我々が言ったことをこの中で、これは国だ、これは県だと分けてくれるだろうと楽観的に考えてしゃべったほうがしゃべりやすいと思います。1つずつこれは市かな、これは県かな、これは国かなというのは実は私らもわからないのはたくさんあるので、これは自由にしゃべってもらったほうが僕のほうはいいと思います。

横山委員

そういう場合もあるでしょうけれども、やっぱりピンポイントじゃないですけども、ねらってここが弱いんだというんだったらそこを強くする。

こういうことがあるんですよ。新潟県では畳の上で死ねる確率はこの間までは一番だったんです。今は1位か2位をほかの県に取られてしまいましたけど、それはそれだけ高齢者を家族が看ているということです。

一方、自殺率が高いというのをどう説明できるのか。

与田座長

でも畳の上で死ねるのは今はほとんどないと思います。ほとんどベッドの上だと思います。自宅で死んだら、今は警察に届けなければならない。そういう意味では難しい時代に

なりましたね。病院で死なないと畳では死ねないですね。簡単にいえば。だからそういう意味では私も畳の上で死にたいと思いますけど、たぶんベッドの上だろうと思っています。この方式がいいのかどうかわかりませんが。

では第二ラウンドへまいりますが、市長今までお聞きになって何かありますか。

篠田市長

特にないんですけども、市民の立場でご論議いただければいいわけだから、こういう問題点があるよとっていただいて、それは県の問題、国の問題だと、こちらがまた整理をして、それをもとに国、県に働きかけていくという材料にさせていただきたいと思います。

与田座長

政令市というのは力がつくんでしょう。お願いします。

ではこれで1ラウンドを終わります。コミュニティのあり方というものについて、今商店街にどうしても議論が集中してしまうんですが、商店街以外のコミュニティもあります。今古町にだけ集中しましたが、いろんなコミュニティの切り口があります。

さっき市長もいわれましたけれども、政令市の中でも分権化していきますと、さっき地域自治組織という話もされましたけれども、その下にコミュニティ協議会みたいなものをつくっていく中で、いわゆるその地域の活性化を目指していこうということを考えておられるわけですが、その辺のところとからみ合わせた上で、今度は地域の活性化、あるいはコミュニティ、分権化というあたりでのご意見をうかがいたいと思います。

横山委員

3世代ありますよね。子供、それから働く世代、そして、じいちゃん、ばあちゃんと。真ん中の生産年齢世帯というのは、これは雇用しかないんです。雇用か農業の場、産業の場、これは市のレベルの仕事ではとっても手に負えない仕事だと思うんですね。県か国ですね。基本的には国ですね。

そうすると頭のところの子供の世代と、それから後ろのほうの年をとった世代、これをどうするかで県なり市なりがこんなにいいところというイメージをつくることは私はできると思うんですね。

与田座長

雇用創出に関しても今おっしゃるように県に任せておいても、今度政令市になったら県は面倒みませんので、たぶん市の仕事に降りてくると思います。その辺も。今の新産業機構とかいろいろありますけれども、ああいうのはやっぱり今度は市と県と一緒にやらなければだめだろうという部分が出てきますからね。

横山委員

新潟県と当市が、ものづくりでうまくやっていけるかどうかですね。

与田座長

そこが一番大きいんですね。

横山委員

この間お話ししましたように、日本の国富は半分以上が第三次産業が生み出しているんですね。新潟市の場合には冬になると物の移動が大変難しい。そして輸出先はアメリカ合衆国がほとんどですから、日本海側から太平洋側まで持っていく。コストがかかる。コストがかかったらとってできませんよね。ですからコストがかからないで名称からいくとワールドワイドで売れるようなそういう職種があるかどうか。

例えば1つ、アニメというのは日本が世界に誇る技術ですよ。

与田座長

新潟もありますよ。アニメ専門学校をやっていますから。

横山委員

ああいうものなら売れるんじゃないか。

与田座長

アニメなどのワールドワイドでもって売れるものを開発すべきである。

平沢委員

私は定住人口のほうを考えて見ました。どういうことかといいますと、これから合併すると、都市部と農村地域の両方ができます。お互いうまく交流できる環境ができつつあるように思います。

定年の65歳を過ぎても20年近く健康で、すでに年金をもらっている年代があるわけですね。その人たちが何をするか。いろいろ考えていられると思いますが、例えば、エコタウン事業をすすめる大切な人材として、健康を兼ねて農薬や化学肥料をほとんどなしにした価値ある肥料を作ってもらえるのではないかと。環境のことを勉強した人たちも大いに戦力になるのではないかと。思います。

定年後何をしたらいいかわからない人が里山に行ったり、あるいは農家のほうに行って畑仕事をしたりできるようにしてはどうか。食材の加工などもすれば、農地の減少対策にもなるのではないかと。毎日ではなくとも週4日であるとか、趣味でやってもいいわけで、それにより豊かで楽しい生活が送れると思います。

志のある人たちが集まり，そこに官がちょっと関わり，電子ツールを活用した連絡体制をとり，集まれる場所ができればそこで何かができる。

健康を第一に考えれば収入は半分以下でいいといういろいろなグループも集まれるんじゃないか。新しい市になって，人間性を失いそうな，毎日効率だけを考えた四角の箱の中に入って，少し休みたいという人たちが，4日ぐらいは行って田んぼを耕して，お祭りにも参加して，そういう形で人間回復を図っていけるんじゃないかと思うんです

与田座長

なかなか難しい面も含んでいますよね。交流するという部分と，例えば市民農園みたいな形で作っていくとか，だからおっしゃるように毎日そこにいないとやっぱりできない部分というのは，食の安全を考え，なおかつ化学肥料を使わないとなればかなりの手間をかけて作らなければならない部分が出てくると思いますから，この辺を両立させるのはなかなか難しいんです。このあたりがこれからの課題として，確かに新津の里山とか白根の果樹園とかたくさん土地が出てくるわけですから，そのあたりを使うかということですよ。

平沢委員

そうですね。やっぱり両者の官民との細やかな連携がないとだめだと思うんです。

与田座長

それが高齢者対策になるんじゃないかと。

平沢委員

そうです。健康になるもの。

与田座長

そうすると街も活性化するではないかと。

長谷川委員

都市の活性化ということから考えると，新潟市と合併する市町村の中では特に都市部に關してはやっぱりコンパクトシティなのかなというイメージがあって，新しい交通手段というので街の魅力を再発見するという部分での装置は必要で，楽しい仕掛けを考えるというのは必要だろうと思っています。

何が楽しくさせるのか，何がワクワクさせるのかというあたりはあるんですが，街並みということになれば統一感というようなことだろうし，連携みたいな部分がどこかしら必要になってくるだろう。

私は港と川とまちという部分は新潟まつりみたいなものでつないで，もっと大きなもの

にして、何か大きな目玉をつくっていくというのも大事なかなという気がしています。

それと交通の部分では、美しい街とは何かかなと思っているんですけど、町並みも大事なんですけど放置自転車を何とかしたいなと。やっぱりあれば見苦しいなと思っていて、例えば本町6番町は本当に悲惨だな。交通手段がないから自転車でこられるのはいいんですが、露天との共存の中でどうなるんだろうというのがあります。だとしたらもっと自転車が走れる街をつくりたい、もっと人が歩く街をつくりたい、というようなことがないと、ゆったりと路地を歩いたりとかというのはできないし、自転車である程度快適に暮らせるというのが健康的な感じがします。

もう1つは、住まいを何とかしたい。中心街に建てられるマンションの間取りは非常に中高年者には不向きだと思います。最近はスケルトンインフルで中は自分で間取りができますよというのが建ちます。やっぱり住まいそのものがよくなければ人はやっぱり安心して、満足して暮らすことはないので、住まいという部分で、住宅産業の部分でもっと力を入れて、新潟って本当住みいいんだよねというところもアピールできるといいなという気がしています。

活性という部分では私マンションにいますけれども、マンションには回覧板が回りません。本町5番町、6番町でみんなで燈籠を作って並べていくお祭りをするんですけど、その真ん中ぐらいにうちのマンションはあるんですが、ほとんど声をかけてもらえない。すごく残念です。自分から行かないと絶対入れないというような感じがあって、マンションに住んでいときはマンションの組合がすべてになってしまって、降りていかないというのがあるので、やっぱりその辺で仕組みがないとだめなのかな。

与田座長

マンションが増えることによって自治組織が崩壊しているという部分はあるのかも知れないですね。マンションはマンション組合があってそこでお金を取られているから、そこで行事の募集もやっているみたいなことでしょうか。それ以外は目に入らないし、また住人はどんどん変わるみたいなことですね。

そういう所がたくさん増えているんですね。だから自治会組織が本当なくなっちゃうんだね。

長谷川委員

そうなんです。すごくそこら辺で危機感があって、マンション住民というのと街というのをつなげなさいいけないんだけど、どうやってつなぐんだらうというのが課題かなという気がしています。

与田座長

交通問題は次回のテーマでございます。これから今の長谷川さんの話を参考しながらや

っていきたいと思いますし、歩くとか自転車という話であれば新潟に前にあった話でモール橋という、覚えている方がいらっしゃるかもしれません。あれなんかは、モール橋を造るときに萬代橋の上にもう1本橋を架けて車は通さない。こういうときにやっぱり一生懸命主張したのはコンテベッキオにしてください。端のほうに商店街をつくってください。これだけで人がいっぱい来るよという話をしたことがあって、歩いて人が渡るための理由としては、橋の上に商店街があれば絶対歩いて渡るよと。ただ橋だけ造ったって、あんなところ誰が渡るかみたいな話で、やっぱり屋根のある橋、商店街のある橋みたいなことを言ったら、それは防災上だめだといわれたんだけど、そういうものが新潟にあれば歩いて回れる。今万代シティができて初めて萬代橋を歩いて渡る人が増えたわけですよ。なぜかというところ向こうにそれまで何もなかったから。駅までは遠いから。萬代橋を歩く人が増えたということは万代シティができてこちらの本町とのつながりができてきたから。

新しいまちづくりとしてはもっとあるなと思っているんですけども、そういうのを考えて歩いて回れる範囲の街というのはやっぱり高齢者にやさしい街ですよ。そういうことを考える必要もあるのかなということをつくづく考えました。

西條委員

私は住んでいる人たちで自分たちが街の主役みたいなものがないと絶対うまくいかないのかなと思いました。2つあって、行く側よりも来てもらう側、それこそ自分たちの街はどういう街で、どういうスタンスで人に喜んでもらえるかというのがわかってないと、ただ行くだけ。勝手に行くだけ。一方通行になったんじゃないかなという気がすごくするんですね。

自分たちの街がどういうところで、どこがいいところで、どうしていただきたいのがお互いにないとだめなんだろうなと思いました。そのためにはやっぱり1人の住民として、それこそ地域のコミュニティがあるかどうかというのが大切だと思います。

私は自治会活動にろくに参加もしていない。夫はサラリーマンでそれこそ舅姑が町内会とかに行って、親世代が行けなくなったら代わりに行くみたいな。その一方で今すごく物騒な事件がおおいので、安心、安全というのがすごく大事だと思っている。

それは何かというと地域の中でおじいちゃん、おばあちゃんが声をかけてくれるとか、それがないとすごく不安な時代だなと思っているんですよ。でもなかなかそれに参加をできない。でも何かしたいといってもなかなか乗る仕組みがないんですね。

さっき、祭りの話が出ていましたけれども、たまたま知り合いが新潟まつりを何とかしましょうという会に参加をされていて、何か意見がないかというときに、私がいるところは小針のほうなんです。新潟まつりって全然関係ないんですね。それはすごく残念で、子供たちに参加できる祭りがほしいなと考えました。

新潟まつりが古町とかが盛り上がるだけじゃなくて同じ日に西とか小針とか青山とかいろんな地域で子供みこしか何かを各拠点の公民館とかセンターなんかでお父さん、お母さ

んが連携をしてつくることができれば、大きいのは街の真ん中でやっけて、各地域地域で子供みこしかなにかあると親同士もつながれるし、孫がかわいいおじいちゃん、おばあちゃん同士もつながれるしみたいなことを考えて、やっぱり祭りとか華々しいものと違って、新たなコミュニティをつくる仕掛けが住民の側も必要かなと思います。

与田座長

そうですね。コミュニティをつくる1つのきっかけとして祭りなんかはとてもいいし、新潟まつりはそれをコミュニティがしているかというみんな嫌々やっている感じがします。面倒くさいみたいな感じでやっているところへもってきて、やっているところは古町だけで。

今おっしゃるようにどうせやるなら全市を巻き込むような形の祭りイベントがあったり、今度政令市になったら白根もたぶん祭りを持っている。亀田も持っている。新津も持っている。それぞれの地域で持っている祭りをそれぞれで生かしてやらなければだめだと思うんですね。

西條委員

祭りというのは世代を超えて顔を知ることできるし、子育て世代の私なんか安心感があるんですね。本当にうちの近所にアパートかマンションができるから、顔がわからないのすごく怖いんですよ。

与田座長

これからは利用すべきですね。コミュニティ協議会でも地域自治組織でもいいけれども、祭りについてどういうふうを考えていくかという、基本的な考え方はぜひ統一していくべきなんですね。

西條委員

公園の清掃なんかに行ってもおじいちゃん、おばあちゃんばかりで、同じ親の世代に会いたいと思っても会えないんですよ。強制的にでも若者部会とか作らないと。

与田座長

祭りって1つの大きな要素だと思います。コミュニティをつくることに関しては。

及川委員

新潟は田園型政令指定都市、結局その中心ってやはり農業ですね。農地がこれだけ広くなるということで、食材、魚も野菜も含めて食の安全というものが大きな要素になります。

今、白根市の畑からディルドリン、アルドリンという DDT の仲間が検出されています。合併したら新潟市に出た、新潟が農薬で汚染されたまちというイメージを全国に持たれないためには、やはり有機無農薬栽培というのを基本としてやって、農薬を減らすことです。

与田座長

昔は虫が食ったんだからうまいとって。今は奥さん方買わない。

及川委員

これはやはり農協も悪いんですけども、消費者も悪い。そんな意識を変える必要があるんじゃないか。

ニンジン畑に行くと大きいニンジンしか出荷しない。大根もそうですね。あとは残してしまう。むしろそういうものを全部買ってくれるような、使えるような形を作らないといけません。

与田座長

そうしないとコストが上がっていきますからね。

及川委員

だからそういうものも売れる。あるいはうちの畑の隅で採れたやつも売れるというのが望ましい。

新潟だったら安全な、安心な、そういう意味での地産地消というか、食べるんだというアピール。それこそ新潟のホテルもそういうところも徹底した安全、安心というのをやっているというそういう宣言をできるようにしなければいけないと思います。

与田座長

だけど食品は安全だけど高いというのはだめですよ。安全だけど安い。それが新潟のいいところだという。どうやってやるんですか。

及川委員

だからいいものはいいい。よくて高く売れるものはいいいんですが、

与田座長

新潟は全部使いますと。安いところは安いところで食べる。

及川委員

市街化調整区域に建てられる施設をうまく使って、ファーマーズマーケットをやるとか。

それも1つじゃないか。

いずれにせよ、魚とか農村とか交流型でいく。ニンジンも短いのでいいですよ。キュウリの曲がったのもいいんです。その代わり安全で安いと。

立派なのを買いたい人には立派なものもあると。そういうことを市が率先して、一緒になってやるということです。そして全体的に減農薬とか無農薬というものを進めていく。

与田座長

昔でいう公設市場みたいなものを新潟市が運営したらいいんじゃないでしょうか。

及川委員

秋田の駅の近くにはそういうのがあります。それから金沢には近江市場というのがありますし、金沢も秋田もすごいにぎわいです。僕もどっちかへ行くと必ず寄りますが、そういうところが新潟にはどこにもない。

新潟市は食の安全宣言をするぐらいのことをやっていくのは1つ必要じゃないですかね。

与田座長

私、憲政記念館でレストランをやれといったことがあるんですよ。芸文を出ると食べるところが全くないし、そういうところで安全な食の提供というものを専門にやるというものもあります。

大浦委員

地域コミュニティ。やはり地域の人同士の顔が見える、しょっちゅう顔が見えて一緒に何かできるということが一番大事だと思うんです。祭りはもちろんすごくいい機会だと思うんですけど。大体年1回ですから。年1回、準備期間も入れて何ヵ月というところだと思うんですね。

さっき篠田市長が話されたコミュニティ協議会を小学校区とか中学校区を1つの単位としているのであれば、せっかくだから学校の環境作りは全部地域です。今学校という学校が考えているわけで、学校の美化とか庭の木を植えるとかビオトープを造るかやっていますよね。

与田座長

小学校のあれを造るんだったら地域に任せればいい。コミュニティ協議会にやらせたらどうか。

大浦委員

例えばある校長が一生懸命ビオトープを造った。次の校長は別のことに興味があって、

いつのまにかピオトープはひからびてしまったというようなことがあると思うんです。そういうふうなことじゃなくて、学校の環境は地域で守ると。今働いている人は忙しいですから、退職して少し時間の余裕のある人たちがそこで手を結んで、その地域の中の学校を魅力的なものにしていく。そういうふうなことも1つはあるんじゃないかと思います。

与田座長

基本的には三世代交流になりますしね。だから小学校区でコミュニティ協議会をつくっていくということになれば各コミュニティ協議会で頑張って、いわゆるOBの方々がやられれば面白いことになるかもしれませんね。けっこう他の地域と競ったりして。そういういわゆる学校という場所を単位にした形での地域づくりというのがありえるかもしれませんね。

大浦委員

学校は学校として別区域になっていますけれども、そうじゃなくて地域の中の1つだと。本当そうなんですけど。今までそういう意識があまりなかった。

与田座長

ところで小学校区なんて先行きなくなる学校が増えてきたらこれはどうすればいいんだと。だから中学校区ぐらいのほうが広いんですかね。コミュニティ協議会が今のこれから増えてくる高齢者のための場所であり、なおかつそれが三世代交流で子供たちとも接触もできるし、それぞれの地域の活性化にもつながるみたいなことになっていけば面白いかもしれませんね。

大浦委員

なるべく小学校は残していただきたい。小さくなくても残していただきたい。

与田座長

でもこれは人がいなければしょうがないでしょう。

大浦委員

ぎりぎりまで頑張っていていただいて、地域の中心になってほしいと思うので。

与田座長

そうですね。私前に小学校を造るときは鉄筋コンクリートをやめてくれと。全部木造にしてくれみたいな話をしたことがあるんですけど、それも国産材を使ったものを造れと。やっぱり学校というところはコミュニティの象徴的な役割を果たす。それも子供だけじゃ

なくてお年よりもそこへ来れるとか、そういうところも学校の開放みたいなところにつながっていきますし、例えば畑を使ったものづくりだってグラウンドの片隅でけっこうできますしね。面白いことになるかもしれませんね。地域ではあそこは今一番広い敷地を持っているんですかね。

大浦委員

そうですね。グラウンドの周りの土地を何とかするというのもありますし、塀垣だって全然違う形になるかもしれません。

与田座長

それをコミュニティ協議会がきちっと守れと。何やるにしても、この単位面白いかもしれません。

大川委員

現在の新潟市、あるいは合併するところも非常に都市化しているところ、逆に純農村地帯、あるいは住宅地帯、いろいろあります。それを市長さんがおっしゃったように、区単位の地域自治組織、そういうのをつくっていくときにやはり区割りを早めに設定していただきたいと思います。いろんな組織の面で、そこに追従する部分がありますので、区割りをやって一からコミュニティを地域内で改めてつくる。そして、それを更に積み上げていく。

それをやっていかないと新潟市新潟市といわれても、我々は相変わらず新潟市ですけども、他市町村の人は何が新潟市だと。何もいいことないと。期待している方もいらっしゃいますのでそこらをやっていくことが当面一番の課題だと思います。

それとあとは団塊の世代ですから、そういった人たちとの間に交流の機会も生まれてくると思いますし、福祉都市づくりというものが始まる。

例えばこれはご存知の方はご存知だと思うんですが、市報にいがたがあります。今の若い親たちは新聞も取ってない。固定電話もない。そうすると市報にいがたは読まない。別の地区センターへ行って求めればもらえるんだと思いますけれども、予防接種の日程表も定かじゃないと。私はそれをコピーをつくってない人にもあげるといっています。ちょっと外れた話になりますけれども、そういう人たちも住んでいる世の中です。

与田座長

今おっしゃるように区割りの問題というのは我々自身からして気になる問題ですね。この区割りで影響を受ける人たちってだれですか。

大川委員

1つは次なる交通体系。区役所へ用事に行くときに、今の市内の交通体系であればそういうところに行く人は問題ない。そうじゃない人たちというのはいろいろ問題になって出てくると思う。それから話が飛ぶんですが、医師会の合併だっていろいろ苦慮しています。住民の健康、福祉にかかわるので、そういう医師会の合併がスムーズにいくかどうか。それが早めに区割りが固まっていたと動きようもあるという、そういう団体はほかにたくさんあると思います。

与田座長

ある程度準備期間がいるから、早めに区割りを決めていただかないと。でも、なかなか決まらないらしいんですね。例えば岩室村だったらこれまで岩室の村役場へ行けばよかったのが、白根市役所までいかなければだめだと。これは遠くなる。こういうのが一番大きい原因でしょうかね。

篠田市長

どうでしょうか。いろいろ区役所の位置によっては問題が出てくる場所あります。ただそれはかなり限定的ですね。

それから区割りについても我々は最短のペースでいこうとしています。合併しないと行政区画審議会ができないという制約がありますので、審議会を最短で終わるようにできるだけ事前にコンセンサス的なものをつくっていきましょうということで、最終的には議会の議決が政令市に進むぎりぎり前に必要なんですが、実質決定するのがもう来年の夏ですよという、そんなに早いという感じでみなさん驚かれます。それから政令市まで1年半あるわけですね。その期間をうまく活用して、一体感づくりとか、あるいは各種トレーニング、場合によっては一部の道路整備、そういうものにその1年7、8ヵ月を充てていくということが重要かなと思っています。

与田座長

1つには区役所の場所の問題とかありますけれども、私としては市が区役所へ行く用事を減らしてくれればだいぶ違って来るはずですね。それで今コンビニでだいぶ代行ができていますから、そういうことを進めていくというのも一方では必要で、IT化とか分散化の面から住民票をもらうのにいちいち区役所へ行くのか。この辺はどうなるんですか。

篠田市長

政令市がスタートしたときにすべてこういう形で改善しますというのを出せるかどうかは多少あるんですけど、合併すると、とりあえず12市町村全部支所になりますよね。今の

新潟市内の黒埼支所と地区事務所，これは同じようにやると。それが政令市になったときに区制が敷かれて区役所ができて，支所をどうするかというのは大きな問題になってきます。そのときに今ご指摘の区役所にくる窓口サービスみたいなもの，これを自分の家でもできるとか，コンビニでもできるとか，あるいは新潟市のまちなかにそういう開いているサービスコーナーがあるとか。

与田座長

ショッピングのついでにできるとか，

篠田市長

そういうセットで，だから支所はこのぐらいでいいでしょうとか，そういうふうに改善策も示しながら，支所の数，いつまでも黒埼を入れると13の支所があるというのはちょっと考えにくいですね。そのとき改善策を出さないと地域の反発が出ますので，改善策と支所の削減をセットで出していくような時期がおそらくくるんじゃないでしょうかね。

与田座長

それは交通網の問題ともかかわってきますからね。そういう意味では市も行政サービスの提供を，地域とか家庭とか市役所以外のどの範囲まで広げていくのか検証する必要があるように思えます。

篠田市長

自分の家はここにあって，自分の住宅範囲の区役所はここなんだけど，通勤はこっちに行っていると。その区役所が近くにあってそこで用を足せるということでもいいわけです。そうすると区役所に行かなければだめだというのは，地域自治組織のメンバーになっている人，これは必ず区役所に相当な頻度で来ていただいて，まちづくりとか環境整備とかを討論していただく。そういうかなり限定された人が区役所に頻繁に足を運ばなければならない。運んでいただきたい。

一般の市民というのはそんなにしょっちゅう区役所に来る必要はないし，さらにその頻度を減らしていく工夫をしていかなければだめだと思います。

与田座長

その代わりまた市役所の距離が遠くなったら困るといいうろんなことがありますけれどもね。ただおっしゃるようにそういうようにもっていけないと区割りの問題なんかもスムーズに決まっていけないところもあるかと思えますね。

篠田市長

分権型を目指す一方で、あんまり行財政の効率化を追い求めすぎては駄目なんで、そのバランスだと思いますね。

熊谷委員

コミュニティという話なんですけれども、地域のコミュニティというのをあんまり明確にイメージできないんですけれども、ただ昔言っていた隣組とか向こう3軒両隣、みんな顔を知っていて挨拶をして、何か事があると、市役所から出た回覧が回ったり、そういうのが都市と農村でだいぶ違うと思うんですけれども、都市化してくるとやっぱり隣りの人の顔を知らない。これは不可避なんじゃないかなと思います。なかなかこの流れはさからえないんじゃないか。おじいさん、おばあさんが地域の集まりには必ず代行してくれる。だんだんその世代が若くなってくるとなかなかそういうものが成立しにくくなるというのが現実だし、市が組織化や台帳みたいなものを作って、昔の小学校で連絡網みたいなものを強制的につくるぐらいの話であれば別ですが、いわゆる交流をし合うとかというのがなかなかしにくくなるのが流れとしてはやむを得ないのかなと思うんですね。

また、新潟に限りませんけれども、外を歩いている人が少ないんですよ。古町だけじゃないんですが、本当に人間がいるのかなと思うときがあります。私の外に出ている時間帯がいけないのか、休日でもすごく少ない印象を持っているんですね。

ほかの都市でもそういうところがありますが、けっこう人通りの多いような都市もあるんですね。地方都市でも。新潟の県民性なのかどうかわかりませんが、コミュニティという概念を求めるよりも人が外に出てくる仕掛けを、家から出てくるような仕掛けを少し工夫する必要があると思います。それはイベントとかお祭りとかいう企画でもよろしいでしょうし、あるいはさっきの商店街のにぎわい作りでもよろしいでしょう。

人が外を歩かないというのはさっさと家に帰るとか、さっさと飲み屋に入っちゃうということで、街を歩いてもあんまり楽しくないからなんですね。ところが最近ウォーキングとかはやっていて、私も実は好きで歩いたりするんですけれども、歩いていてもあんまり人に会わないんですね。それは歩きたくなるような道路がなかったりとかがあるのかもしれないですね。私は新潟駅から家まで歩いて帰ったりします。30分ぐらいかかりますけれどもね。

与田座長

東京の人は歩くんですよ。やっぱりこれから先の交通問題にもかかわってきますけど、新潟には駅がないんですよ。バス停はあるんです。東京の人はなぜ歩くかという駅から歩くんですよ。駅から用事のところまで歩くんですよ。地下鉄の駅があるから歩くんですよ。

新潟は車に乗ってしまうかバスに乗ってしまえば後は歩く必要はないですから、この辺

はこれからどうすれば歩く町にできるかということを見ると、さっき長谷川さんも言われていましたけど、公共交通機関の交通体系の造り方でいえば例えばモノレールを回すにしても LRT を回すにしても、駅をどこに置くかによってそこまで歩いていかなければならない。ある距離があると歩く人が増えるということは出てくるんですね。その辺はにぎわいとかかわりでどういうふうに交通機関を配していくか、LRT を置くかと、あるいはガイドウェイバスにするのかわかりませんが、駅の場所とにぎわいは大きな関係があると思いますね。新潟は車を使う人が多くて、商店の前に車を停めても誰も怒らない。最近は厳しくなってきました。

そういう点でいうと歩く町という考え方がどうやって出てくるかというのはこれからの課題ですね。

熊谷委員

そうですね。歩いて表へ出てくるというのも大事だし、あとちょっとたたずむとか、ポケットパークみたいなものも少しずつありますけれども、人が出てきて、例えばベンチに座るとか。結局コミュニティというものをむりやり作ることが難しいとすれば、人が外に出てきて挨拶をするとか、もう少し家の中から出てきなさいというようなそういう仕掛けがあるといいですね。白山公園はけっこういい公園なんですけど、あんまり利用がない。

与田座長

日本で一番最初にできた公園なんで、

熊谷委員

あまり人どおりを見かけないんですね。やすらぎ堤みたいなものを造った。あれは大成功ですけども、やっぱりウイークディはあまりいない。休日はばらばらとはいますけど。

与田座長

今回のテーマは交通体系でよろしゅうございますか。交通体系と土地利用というのが入ります。次回までが大体総論だと。その後今度各論に入っていきますので、皆さんの一般的な意見をお聞きしたいというところが土地利用と交通体系、これでもよろしゅうございますね。この2つを今回のテーマで行います。

横山委員

紙の資料をつけていただかないと、例えばどういう交通体系になっているのか、土地利用の関係、都市がどうだとか。

与田座長

それに関してはこんなふうな今案がありますよ、みたいなことがもしあればつけてもらいたいと思いますけれども、交通体系については基本的に聞きたいと思っているのはどういうふうに打ち出すべきかとか、どういう路線が必要かとか、そのときにどういう土地利用がお互いにできるかという。土地利用と交通体系が基本的な次回のテーマでございますので、頭にお入れになってご参加いただきたいと思います。もし資料があればお送りする。

時間が過ぎました。最後に市長何かおありになれば。

篠田市長

先ほど大浦先生からコミュニティのことを考えるときには学校を大事だよというお話があって、私どももそれ非常に大切なポイントだと思っています。大浦先生には恐縮なんですけど教育ビジョンの委員も兼ねていただいているんですが、両方話が進んでいった段階で教育ビジョンで今こんな話が出ていますよとか、まちづくりの中でもう少し教育ビジョンを踏まえて具体的にどこまで論理を伸ばしていきましょうとか、一番あれでいえば合同会議なんていうのも考えられるかもしれないですけども、そういうあたり、やっぱりコミュニティを身近に他人事じゃなく思わせる仕掛け、仕組みもそのうち考えなければだめだと。

そのとき学校というのは非常に大きいスペースですし、一番最初には防災をやっていたいで、あとは地域福祉、そして教育、このあたりがコミュニティって何のこっちゃということを、人事じゃない。身近なことなんですよというのを理解していただくのに最低この3つの視点は大事かなと思っていますので、特に教育ビジョンづくりにも分権型政令指定都市を意識して教育ビジョンをご論議をお願いしたいというふうに思っているの、そのあたりリンクするような形ができればいいなと思ってます。

与田座長

どこかで合体しますよね。

篠田市長

生涯学習、とにかく義務教育も地域の中に入れて考えましょうと。幼児教育から生涯学習、お年寄りの生きがいづくりまで。そういう中で学校というのを義務教育に徹底しなくて考えられるんじゃないかと。あれが一番広いスペースがあって。

与田座長

大変ありがとうございました。これで終わります。

- 以上。